

開發臺灣世界遺產潛力點的觀光教材： 從建構詞彙的視角出發

林玉惠

輔仁大學日本語文學系教授

摘要

疫情後日本觀光客重啟前往台灣旅行時，面臨日本圓貶值、台日航班未完全恢復，以及機票價格飆升等問題。在這種情況下，台灣觀光業界需要新的策略來吸引日本遊客。疫情提供了一個機會，使旅遊方法從成本導向轉向價值導向，進入重視台灣特有差異化和價值創造的新時代。隨著這種轉變，促進深度旅遊並探索符合可持續發展目標（SDGs）的旅遊模式變得迫切。本研究旨在深入傳達台灣的魅力，並整備日文的觀光相關詞彙。本文針對台灣的 17 個（共 18 處）世界遺產候選地，研究介紹這些遺產時所使用的詞彙，並進行比較分析。透過這些分析，揭示每個遺產的特點與語言上的差異，並以此為基礎開發專門的教材。這些教材不僅是日語教育的重要資源，也可用於台灣的觀光導遊和隨團人員訓練。此外，為日語學習者提供畢業後在日語觀光旅遊行業發揮作用的基礎知識，同時提升學生的學習動機，並有助於提高台灣觀光業的能力。如此，深入理解台灣世界遺產潛力點的魅力，並探索適應日本觀光市場的新可能性。

關鍵詞：詞彙教材開發、可持續發展目標（SDGs）、世界遺產潛力點、
台灣觀光、日語觀光旅遊業界

受理日期：2024 年 08 月 18 日

通過日期：2024 年 10 月 25 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202412_(43).0008

Development of Tourism Materials for Supporting Potential World Heritage Sites in Taiwan Sites: A Perspective on Vocabulary

Lin, Yu-Hui

Professor, Department of Japanese Language and Literature,
Fu Jen Catholic University

Abstract

Post-pandemic, Japanese tourists resuming travel to Taiwan face challenges such as the depreciation of the Japanese yen, non-restoration of Taiwan-Japan flights, and soaring ticket prices. Under these circumstances, Taiwan's tourism industry needs new strategies to attract Japanese tourists. The pandemic has prompted a shift from cost-oriented to value-oriented travel approaches, moving towards an era that emphasizes Taiwan's unique differentiation and value creation. This shift necessitates the promotion of in-depth tourism and exploration of tourism forms that align with Sustainable Development Goals (SDGs). This study aims to deeply convey Taiwan's allure and prepare tourism-related vocabulary in Japanese. It focuses on 17 (18 locations) potential World Heritage Sites in Taiwan, investigating and comparatively analyzing the vocabulary used in their introduction. From this analysis, the goal is to emphasize each heritage site's unique traits and linguistic nuances, developing specialized materials. These will be crucial for Japanese language education and training Taiwanese tourism professionals. Additionally, they'll provide essential knowledge for Japanese language learners to thrive in the tourism industry post-graduation, enhancing student motivation and skillsets in Taiwan's tourism sector. The study explores understanding Taiwan's heritage charm and adapting to Japan's tourism market.

Keywords: Vocabulary Material Development, Sustainable Development Goals (SDGs), World Heritage Candidates, Taiwan Tourism, Japanese Tourism Industry

台湾の世界遺産候補地支援のための観光教材開発 —語彙を中心とした取り組み—

林玉恵

輔仁大学日本語文学科教授

要旨

コロナ禍後、日本人観光客が台湾への旅行を再開するにあたり、日本円の下落や台日航空便の未復旧、航空券価格の高騰といった課題が存在する。これらの状況下で、台湾の観光業界は日本の観光客を引き寄せるための新しい戦略が必要となっている。コロナ禍を機に、旅行のアプローチをコスト志向から価値志向へ転換し、台湾ならではの差別化と価値創造を重視する時代に移行している。この転換に伴い、ディープな観光を促進し、持続可能な開発目標（SDGs）に対応する観光形態を模索することが求められている。この研究は、台湾の魅力を深く伝え、日本語での観光関連語彙の整備を目指している。本稿では、台湾の世界遺産候補地 17 箇所（18 地点）を対象に、遺産の紹介に使われる語彙を調査し、比較分析を行う。この分析から、各遺産の特徴や言語的な違いを明らかにし、特化した教材を開発することを目指す。これらの教材は、日本語教育や台湾の観光ガイド、添乗員のトレーニングに活用できる重要なリソースとなる。また、日本語学習者が卒業後に日本語観光旅行業界で活躍できる基礎知識を提供すると共に、学生の学習意欲を高め、台湾の観光産業における能力向上に貢献することも狙っている。このようにして、台湾の世界遺産候補地の魅力を深く理解し、日本の観光市場に適応する新たな可能性を模索する。

キーワード：語彙教材開発、持続可能な開発目標（SDGs）、世界遺産候補地、台湾観光、日本語観光旅行業界

台湾の世界遺産候補地支援のための観光教材開発 —語彙を中心とした取り組み—

林玉恵

輔仁大学日本語文学科教授

1. はじめに

コロナ禍後の日本人による台湾観光の再開は、日本円の下落や台日航空便の未復旧、航空券価格の高騰といった外的要因に直面している。このような状況における課題は、日本の観光客をどのように引き寄せるかという点にあり、台湾にはいかなる魅力があるのか掘り下げる必要がある。『天下雑誌』701号では、表紙ストーリーに「台湾頂級旅遊：八個全民行動，翻轉國旅（筆者訳：台湾のトップクラスの旅行：8つの国民的なアクションで国内旅行を転換する）」と題され、主に6つのハイエンドな旅行提案に焦点を絞り、台湾の国内旅行の問題が指摘されている。ここでは、6名のトッププレイヤーによる国内旅行のアップグレード案が提示されており、具体的には、「地域の生活体験」、「心のこもったサービス」、「各地の特色の更なる深化」、「総合的な計画とパッケージの必要性」、「ユニークな差別化の創出」、「初めての旅行客とリピート訪問客に対する異なるプランの提案」、「深化した旅行の推進」、「地元ガイドを育成し、町や村のユニークなストーリーの開発」といった提案がなされている。つまり、コロナ禍が国内旅行転換の絶好の機会であると考え、国内旅行はコスト志向から価値志向への転換が必要だと述べている。このように、台湾の観光について、ユニークな差別化と新たな価値創造を再考する必要がある。

これに対処するための解決策として、こういったアプローチが考えられるのであろうか。ディープな観光を促進し、これまでの観光とは異なる独自の差別化を生み出す方法とはいかなるものであろうか。また、近年では国際的に持続可能な開発目標（SDGs）が注目さ

れており、世界的な共通言語となっている。そこで、本稿では台湾の世界遺産候補地を研究対象とし、日本語でディープな観光に関連する語彙を選定し、整備することを目的とする。台日観光市場の要求に応えるだけでなく、日本語を勉強する学生が卒業後に日本語観光旅行業界で基本的な知識を獲得するための基盤を提供することも目指す。さらに、学生の日本語学習への興味や動機を高め、台湾の観光案内や産業における基本的な能力を向上させるものとなれば幸いである。なお、本研究の内容、意義、および成果は、以下の3点にまとめることができる。

- (1) 本研究では、台湾の世界遺産候補地 17 か所（18 地点）を対象に、それぞれの遺産を紹介する際に使用される語彙を調査し、比較分析を行う。この分析を通じて、遺産ごとの語彙の特徴や違いを明らかにし、それを基に、台湾の世界遺産候補地をサポートするための特化した語彙教材を開発する。これらの教材は、日本語の学習において重要なリソースとなるだけでなく、台湾の観光ガイドや添乗員のトレーニングにも役立てられることを目指している。
- (2) 台湾の世界遺産候補地に関連する語彙を整理・分析し、学生たちの語彙力を拡充し、台湾の日本語教育における語彙教育の質を向上させ、また台湾の日本語ガイド・添乗員の育成に寄与することを目的にする。また、台湾の日本語学科や観光学科における観光関連科目の語彙指導に役立つ情報を提供する。
- (3) コロナ後の台日観光旅行の動向と傾向を理解し、台湾の世界遺産候補地の特徴と独自のストーリーを整理・分析し、また台湾の日本語観光旅行の現状と課題を洞察し、持続可能な観光人材の育成に貢献する。

2. 台湾の世界遺産候補地について

周知のように、世界遺産（World Heritage）は、保護世界文化遺産および自然遺産の保護に関する条約に基づいて決定されたランドマ

ークや地域であり、国際連合教育科学文化機関（UNESCO）のリストに登録されている。その主な目的は、普遍的な価値を持つ人類共通の財産を保護することである。世界遺産には、古代の遺跡、歴史的建造物、景観デザイン、現存する文化伝統、自然景観（砂漠、森林、島々、湖、山など）などが含まれ、自然遺産、文化遺産、その両方の要素を兼ね備えた複合遺産に分類される。2024年8月までの最新の統計¹によると、世界遺産は文化遺産952件、自然遺産231件、複合遺産40件を含む、合計1,223件が登録されている。しかし、残念ながら、これらの世界遺産リストには台湾のものが含まれていない。世界遺産は国際社会における重要な文化的・自然的価値の象徴として認識されている。その指定は、その場所が持つ独特の文化的または自然的価値を国際社会が認め、保全しようとする意思の表れである。世界遺産として認定されることは、その地域の文化や自然に対する認識を高め、観光や教育における関心を促進する効果がある。そのため、多くの国々は世界遺産のリストに自国の貴重な文化財や自然財を登録することを目指しており、台湾もその一つである。台湾は独自の文化的小および自然的遺産を持ち、その価値を国際社会に認められる日を目指している。

これは台湾には基準を満たす遺産が存在しないためではない。主な理由は台湾が国際連合の加盟国でなく、「保護世界文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」に署名していないためである。ただし、世界遺産への登録は国際的な知名度を高め、文化財を積極的に保護する機会を提供するため、2002年には文化部（旧：行政院文化建設委員会）が国内外の学者による世界遺産候補地の推薦を呼びかけ、2003年には台湾の世界遺産候補地として12箇所が選ばれた。その後、2009年に5か所が追加され、2010年には「金馬戦地文化」が「金門戦地文化」および「馬祖戦地文化」に改名された。これにより、現在、台湾の世界遺産候補地は合計17か所（18地点）とな

¹ 現時点で最新の資料となる。

っている。文化資産庁の台湾の世界遺産候補地の公式ウェブサイト²によれば、台湾の世界遺産候補地は表1のようにまとめられる。なお、公式ウェブサイト上の資産名に二つの異なる日本語訳がある場合、両方の訳語が掲載されることとなる。例えば、「水金九鉱業遺跡」のような場合、「金瓜石集落」と「水金九鉱業遺跡」という二つの異なる日本語訳が見られる。

表1 台湾の世界遺産候補地一覧

No.	資産名	所在地	記載年	区分
1	大屯火山群	台北市、新北市	2003	自然
2	太魯閣国家公園	花蓮県、台中市、南投県	2003	自然
3	金瓜石集落／水金九鉱業遺跡	新北市	2003	文化
4	玉山国家公園	花蓮県、嘉義県、南投県、 高雄市	2003	自然
5	金門戦地文化	金門県	2003	文化
6	阿里山森林鉄道	嘉義市、嘉義県、南投県	2003	複合
7	卑南遺跡及び都蘭山	台東県	2003	文化
8	淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群	新北市	2003	文化
9	棲蘭山ヒノキ林	宜蘭県、新竹県、桃園県、 新北市	2003	自然
10	澎湖玄武岩自然保護区／澎湖玄武岩自然保留区	澎湖県	2003	自然
11	台鉄旧山線／台湾鉄路管理局旧線	苗栗県、台中市	2003	文化
12	蘭嶼集落及び自然景観	台東県	2003	複合
13	烏山頭ダム及び嘉南大用水路	雲林県、嘉義県、台南市	2009	文化
14	馬祖戦地文化	連江県	2009	文化
15	屏東排湾(パイワン)族の石板屋集落／パイワン族及びルカイ族の石板屋集落	屏東県	2009	文化
16	桃園の埤塘／桃園台地の陂塘	桃園市	2009	文化
17	樂生療養院	新北市	2009	文化
18	澎湖石滬	澎湖県	2009	文化

3. 先行研究および問題所在

台湾の世界遺産候補地支援の観点から、語彙を中心とした観光教

² https://twh.boch.gov.tw/taiwan/index.aspx?lang=zh_tw

材開発を考察した先行研究は、管見の限りでは見当たらないものの、観光客のガイド解説に対する満足度、解説技術、サービス品質、解説ガイドシステム、さらにはバーチャルリアリティ（VR）と拡張現実（AR）によるガイドを対象にした研究は散見する。したがって、ここでは、本稿と関連性の高い先行研究を中心に、観光ガイド解説の定義とその核心的な意味、ディープな観光ガイドと台湾文化、台湾文化の重要性についての概要と課題をまとめたのち、本稿の内容と比較したい。

蔡豊琪（2017）は、日本語によるディープな観光ガイドツアーの案内者が備えるべき能力と、「日本語ガイド理論と実践」のカリキュラムにおいて台北の歴史的な名所をどう取り入れるかについての研究を行った。この研究は、理想的な日本語ガイドツアー案内者が持つべき能力に焦点を当て、ガイド専門のカリキュラムの問題点、改善の方向性、教育目標、日本語ガイドツアー市場の現状とカリキュラムの計画について詳しく検討している。さらに、2012年以降、台北で「地域性の強化」「深度の拡大」「多様性の追求」を求める外国人観光客のニーズに応えるため、外国語による徒歩でのディープな観光ガイドツアーが設立され、様々なテーマのコースを提供し、台湾の地元文化を深く理解したい外国人観光客に向けたサービスが行われていることが述べられている。この研究によれば、「徒歩によるディープな観光ガイドツアー（Walking Tour）」は「街の隅々を散歩するように歩き、各地域の異なる地元文化や歴史的な名所、ストーリーを詳しく紹介する」と定義され、一般的な観光ガイドとの違いとして、交通手段、ガイド時間、カスタマイズの程度、観光地の紹介方法、付随する旅程、ガイド範囲、必要な設備と費用の差異などが挙げられている。

傅玉香（2020）は、「導覧解説日語」という実験的な授業を開設し、学びながら行う教育、協力学習、サポート学習を用いて、地域創生に連携するコース設計を行った。この授業の目的は、地域文化産業の活性化と、地域文化を重視したガイドを育つことである。また、

授業の目標は、学生が言語と文化に対する探究心を高め、就職能力と生涯学習のスキルとを結びつけることにある。この論では、成功したガイド解説はまず優れたガイドプランとスクリプトを必要とすると主張している。ガイドは物語を「見つける」能力に加えて、「書く」能力、「話す」能力が必要であり、さらに重要なのは、物語がまず自分自身を感動させ、それから他人を感動させることであると述べている。また、「導覧解説日語」は、地域創生の観点から南台湾の屏東を深く紹介し、学生が地域文化への関心と学習成果を高めることを目指している。さらに、台湾は多言語・多文化社会であるため、台湾人は自らの視点でガイドを行うべきであるとも提案している。研究結果としては、学生は日本語でガイドと解説を行う能力がある、「学びながら行う教育」、グループ協力学習、サポート学習といった教育モデルにより学生の満足度が高い、現場でのガイド前の実習として、PPT ファイルを使用したプレゼンテーションが行われ、ガイド経験が積み重ねられる、地域創生に連携し、地域を中心としたガイド解説コース設計を行うことで、学習が深化するといった点が挙げられている。

自国文化と日本語教育に関する研究として、林長河（2014・2016）が挙げられる。これらの研究は、台湾の日本語教育における自国文化の要素の欠如を指摘し、そのために自国文化を重視する観点から、台湾の歴史、宗教文化、伝統建築などの自国文化を日本語教育のカリキュラムや教育に組み込むことを提案している。林長河（2014）は、台湾の日本語関連学科の教育現状を調査した後、JSP（日本語教育サポートプログラム）、カリキュラム設計、内容重視教育（CBI）などの言語教育理論を用いて、自国文化の価値と意義を位置づけている。この論では、高校までの自国文化の教育不足、国内の日本語関連学科での台湾文化に関する科目の欠如、中高級日本語会話教育の実際の内容が十分でないことなど、自国文化を広めるための3つの課題を提起している。例として龍山寺を挙げ、JSP 理論に基づき、自国文化専用のコンテキスト、語彙、文法の導入を強調し、カリキ

ュラムは革新的であるべきであり、授業内容に重点を置くべきだと提案している。

また、林長河（2016）は、本国文化を本国の宗教、精神、伝統文化、歴史、地理、食、住、娯楽、観光名所、歴史的な重要人物、産業、重要都市などと定義し、そのようなテーマと内容をカリキュラムに組み込むことを提案している。この研究は、台湾の日本語学科で本国文化関連の授業を行う6人の教員を訪問し、日本語で台湾文化を紹介する授業の現状と課題を実地で調査した。調査結果では、このような授業が実用性が高く、一般の日本語授業よりも内容が活動的で生き生きしており、学生からの支持と好評を得ていること、将来の就職との関連性、実務界の支援、教室外での授業、資金投入、資格取得との結びつきなどの利点がある一方で、課外活動が教員に負担を与える、新しい教育法の探求、多様な評価方法の模索、資金獲得や教員の体力負担の増大、学生の発表技術のトレーニングなどの問題も存在していることがわかった。これらの研究は、日本語教育において自国文化の統合を重視し、そのようなカリキュラムは言語教育に関する理論と組み合わせて、内容を充実させる必要があることを示唆している。

蔡豊琪（2017）と傅玉香（2020）は、主にディープな観光ガイドツアーと教育プログラムの組み合わせを研究対象とした。一方、林長河（2014・2016）は自国文化の重要性を踏まえ、台湾の日本語教育において自国文化の紹介を組み込むことの必要性和重要性を提唱している。以上の先行研究からわかることは、「一般的な観光ガイド」、「日本語ミニガイド」、「徒歩によるディープな観光ガイド」が観光時に可能なガイドの種類であり、訪れる客の性質や目的に応じて、ガイドの種類も変わるということである。さらに、ガイド人材の育成は、観光関連のカリキュラムと組み合わせて行うことができ、学生が台湾の地域文化を深く理解することから始め、より深く多様なガイド解説を提供し、地域産業の活性化に寄与することができる。これらの研究は、自国文化に含まれる具体的な要素や種類、内容、

具体的な日本語ガイド解説の例については詳しく探討していない。したがって、本稿では、台湾の世界遺産候補地に関連する語彙を整理・分析し、学生たちの語彙力を向上させることを目的としている。これは台湾の日本語教育やガイド・添乗員の育成に貢献し、日本語学科や観光学科の教育においても役立つ情報を提供することを目指している。

4. 語彙面の重要性

台湾の世界遺産候補地への支援において、台湾文化と日本語教育に関する研究が重要な役割を果たしている。前述した林長河（2014・2016）は、台湾文化の重要性を強調し、その尊重を提案しており、具体的には台湾の歴史、宗教文化、伝統建築などを日本語教育のカリキュラムに組み込む必要性を指摘している。林長河（2014）では、台湾の日本語関連学科の教育状況を詳細に調査し、JSP、カリキュラム設計、CBIなどの言語教育理論と結びつけ、台湾文化の価値と意義を明確にした。この論では、高校以前における台湾文化教育の不足、国内の日本語関連学科における台湾文化科目の不足、中高級日本語会話教育の内容が不十分であることなど、台湾文化の普及に関する3つの課題を浮き彫りにした。また、同時に龍山寺を例に挙げ、JSP理論を活用して台湾文化専用の文脈、語彙、文法を強調し、カリキュラムを革新し、教育の内容に重点を置くことを提案している。このような取り組みは、台湾の世界遺産候補地に対する支援を効果的に進め、台湾文化の保存と普及を促進する重要なステップとなる。台湾はその豊かな文化遺産と壮大な自然景観で知られており、世界遺産の登録が期待されている。しかし、世界遺産の登録には多くの課題や困難が伴う。本稿では、その中でも特に語彙面の重要性に焦点を絞り、台湾の世界遺産候補地への支援について探求する。

5. 台湾の世界遺産候補地について

5.1 台湾の世界遺産候補地に関する資料

台湾における世界遺産候補地の潜在的な価値を紹介した専門書は、主に以下のものがある。まず、台湾の文化庁文化財局が 2012 年と 2017 年に刊行した『世遺 18 臺灣世界遺産潛力點向前行』および『帶著 18 個記憶去旅行：臺灣世界遺産潛力點筆記書』が挙げられる。また、2017 年には平野久美子によって『ユネスコ番外地 台湾世界遺産案内』も刊行された。この書籍は、現在唯一の日本語で刊行された台湾世界遺産候補地の潜在的な価値を紹介する専門書である。そして、2022 年には聯經出版事業股份有限公司から、この本の中国語版『臺灣的世界遺産潛力點』が刊行された。興味深いことに、2013 年には日本で「一般社団法人 台湾世界遺産登録応援会」という組織が設立されており、この団体は「国際社会を喚起し、日本を拠点として台湾（現在国連により国として認識されていない）の世界遺産登録を支援する活動を広告や署名活動を通じて行うことを目的としている。これにより、台湾の世界遺産候補地の潜在的な価値は台湾以外に日本でも支援の動きがあり、関心が寄せられていることが分かる。

これらの専門書の出版や支援団体の設立の主な目的は、台湾の 18 か所の世界遺産候補地の潜在的な価値を広く社会に紹介し、これらの遺産の保護と保存を推進することである。また、世界遺産に対する人々の関心を喚起し、最終的には台湾の世界遺産候補地の潜在的な価値が国際的に認められ、国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の世界遺産リストに登録されることを目指している。ただ、これらの書籍は台湾の世界遺産候補地について説明する際に、一定の基準に従わず、個々の候補地ごとに異なる内容で解説されており、研究資料としては適していない。そのため、本稿では、前述した台湾の世界遺産候補地の公式ウェブサイトを活用し、4 つのカテゴリー（「基本説明」、「環境紹介」、「歴史と由来」、「入選説明」）から抽出した単語に対して調査を行う。これにより、台湾の世界遺産候補地

17 か所（18 地点）の解説と紹介に使用される語彙について検討する。

5.2 台湾の世界遺産候補地の解説と紹介に使用される語彙

台湾の世界遺産候補地の説明と紹介に使用される語彙は、台湾の世界遺産候補地の公式ウェブサイトから抽出し、その語の単位は索引の出現形に従った。具体的な選定作業は、以下の（1）～（6）の基準による。

- （1）カタカナ表記の地名は漢字に変換する（例：「ビン江口」＝“閩江口”³、「東キョ」「西キョ」＝“東莒”“西莒”など）。
- （2）説明文はそのままとする（例：“閩東”（福建省北東部）、“泉州人”（福建省泉州の人々）、“争取最後勝利”（最後には勝利を勝ち取れ）、“枕戈待旦”（常に警戒を怠るな）など）。
- （3）写真の文字は固有名詞であるため削除する（例：“金門模範街”、“金門八二三戰史館”など）。
- （4）固有名詞、地名、植物名、動物名などはそのままとする（例：“馬祖行政公署”、“蘭嶼”、“台湾一葉蘭”、“高山白腹鼠”など）。
- （5）固有名詞や難読字の読み方は削除する（例：“滬尾砲台”（こびほうだい）の「こびほうだい」、片理（へんり）の「へんり」、礫岩（れきがん）の「れきがん」などを削除）。
- （6）同音同義語で異なる表記が見られる場合は、一つの語にまとめることとする。（例：「よい・良い・いい」や「固い・硬い・堅い」など）。

上記の（1）～（6）の基準に基づいて選出された、台湾の世界遺産候補地に関する説明と紹介に使用されている「基本説明」、「環境紹介」、「歴史と由来」、「入選説明」の4つのカテゴリーの分析結果は、AIテキスト分析ツール UserLocal テキストマイニングによって取得した。この分析は、テキストデータから重要な情報を抽出し、視覚的に表現することを可能にする。ただし、紙幅の制限で、ここ

³ 本稿では日本の漢字を「」で、中国の漢字を“”で表し、対照させることとする。

ではワードクラウドと共起キーワードの分析に限定した行った。

5.3 「基本説明」に使用される語彙

まず、ワードクラウドの分析について説明する。ワードクラウドは、単語の出現頻度に基づいて単語を視覚的に表現する方法である。図1に示されたワードクラウドからは、特に大きく表示された単語（「ヘクタール」「平方キロメートル」「嶼」「対象地域」「キロメートル」「面積」「新北市」「台地」「緩衝」「滬」⁴など）が台湾の世界遺産候補地の「基本説明」に関する重要なキーワードであることが分かる。これらの単語は、スコア⁵が高いことから、選ばれた候補地を特徴づける重要な要素であると言える。

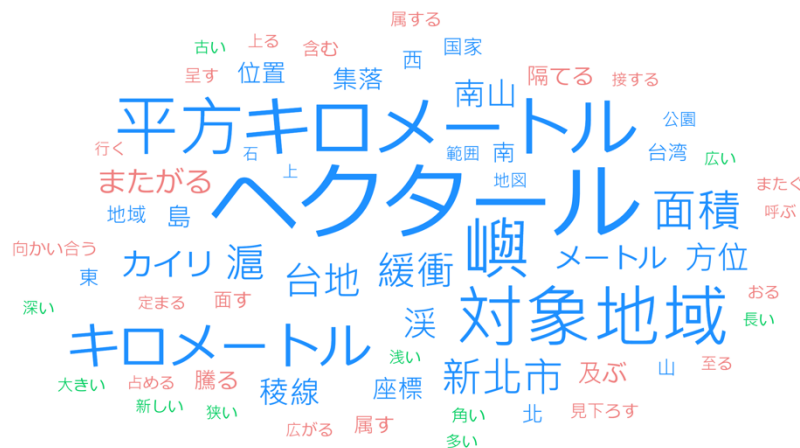


図1 「基本説明」に使用される語彙のワードクラウド

次に、共起キーワードについて説明したい。UserLocal テキストマイニングによれば、共起とは、一つの文章内で、特定の単語セット

4 「滬」は「石」と連用して、「石滬^{いしづり}」という一語になるが、UserLocal テキストマイニングによって「石」と「滬」に分割されてしまった。実際には、「石滬」は「馬祖戦地文化」の説明文で頻繁に使用されており、そのため「滬」の文字がワードクラウドで大きく表示されている。また、「石滬」は、漁業や水産業で使用される魚を捕獲するための構造物や設備である。通常、岩や石を積み上げて作られ、魚が入ると簡単に出られないように設計されている。「石滬」は伝統的な漁業方法の一つで、持続可能な漁業を支援し、環境に影響を与えない効果的な手法である。

⁵ UserLocal テキストマイニングによれば、スコアが高い単語は、そのテキストを特徴づける単語であるといえる。

が同時に出現することを指す。共起キーワードとは、文中において単語の出現パターンが似通っている単語同士を線で結びつけて可視化した図である。出現頻度が高い単語ほど大きく表示され、また共起の強度が高いほど太い線で表現される。図2は、UserLocal テキストマイニングを用いて台湾の世界遺産候補地の「基本説明」に関する共起キーワードを示したものである。共起キーワードのペアが特定の文脈で使用されていることが分かる。たとえば、「面積 ヘクタール」のような単語ペアは、文中で候補地の面積に関連した文脈で使用されており、その関連性が共起回数を通じて示唆されている。この共起キーワードの分析を通じて、台湾の世界遺産候補地に関連する単語同士の関係性や文脈が視覚的に理解され、文章全体のテーマやキーワードの重要性が明らかになる。

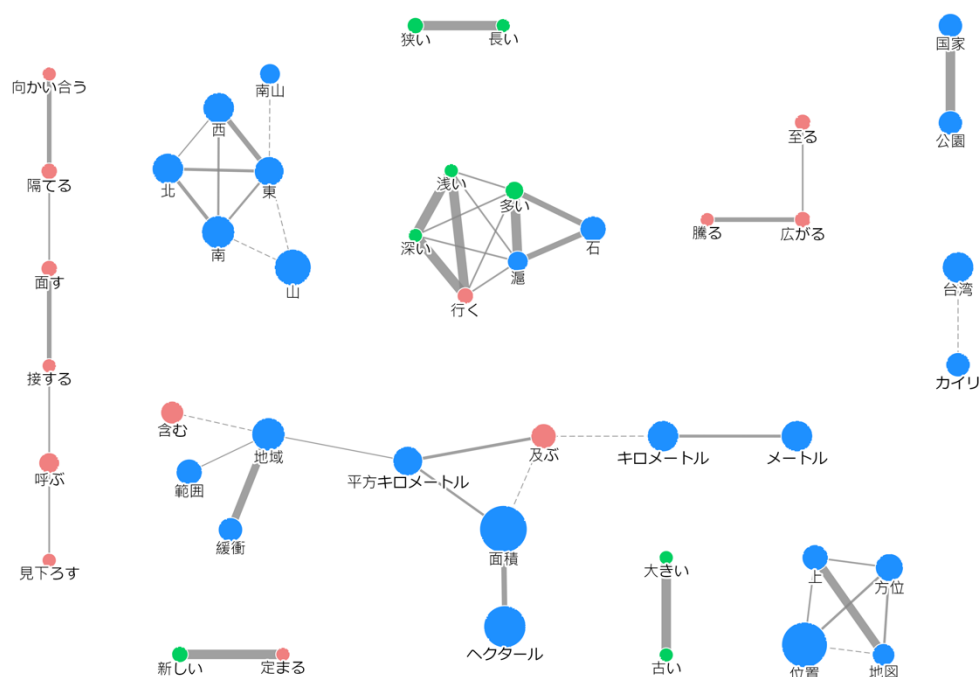


図2 「基本説明」に使用される語彙の共起キーワード

5.4 「環境紹介」に使用される語彙

図3に示されたワードクラウドからは、特に大きく表示された単語（「瀝」「澎湖」「タイワン」「生息」「海拔」「メートル」「固有種」「淡水」「植物」「台湾」「石板」「分布」など）が台湾の世界遺産候

補地の「環境紹介」に関する重要なキーワードであることが分かる。例えば、「太魯閣国家公園」の「環境紹介」では、「高山ツンドラの生態系：海拔 3500 メートル以上の高山に分布しています。岩石はむき出しになっており、風化も激しく、岩層には土壌の堆積が見られません。気温は非常に低く、毎年 4 カ月ほどの積雪期があり、風も強いです。ニイタカビャクシンやニイタカシシウド、アカゲツツジなど高山でよく見られる植物のほかに、南湖圏谷の各地域には 40 種類の希少植物が生息しています。特にタイリンアカバナの美しさは群を抜いています」と記述されている。この中で「海拔」、「メートル」、「生息」、「分布」、「植物」、「高山」などが重要なキーワードとして挙げられている。

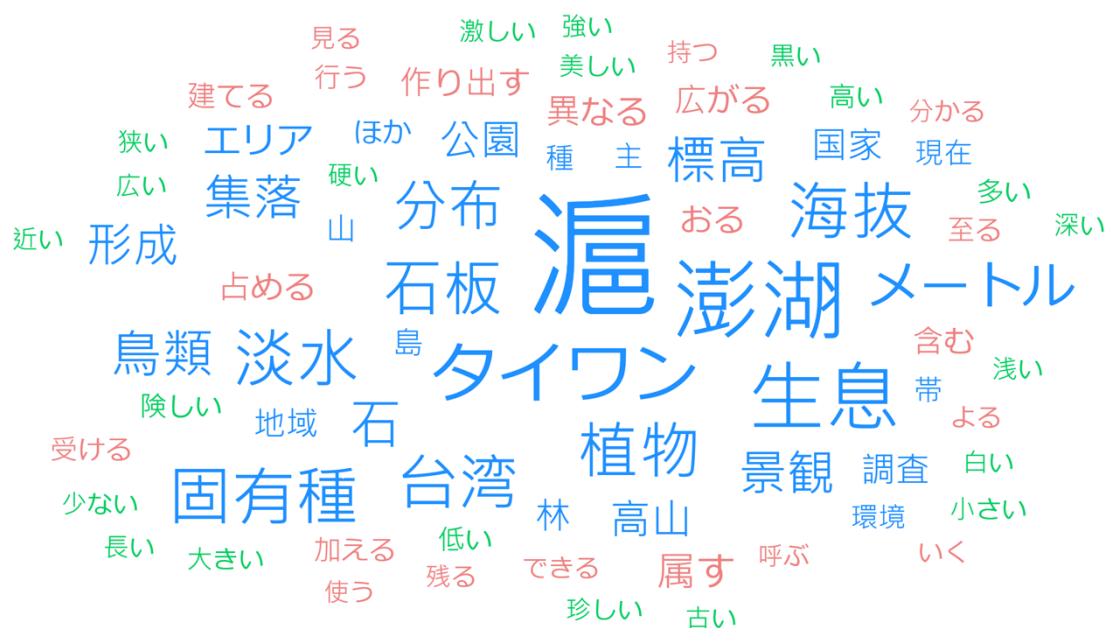


図 3 「環境紹介」に使用される語彙のワードクラウド

さらに、図 4 は、UserLocal テキストマイニングを用いて台湾の世界遺産候補地の「環境紹介」に関する共起キーワードを示したものである。共起キーワードのペアが特定の文脈で使用されていることが分かる。たとえば、「台湾 固有種」のような単語ペアは、文中で候補地の環境紹介に関連した文脈で使用されており、その関連性が

共起回数を通じて示唆されている。

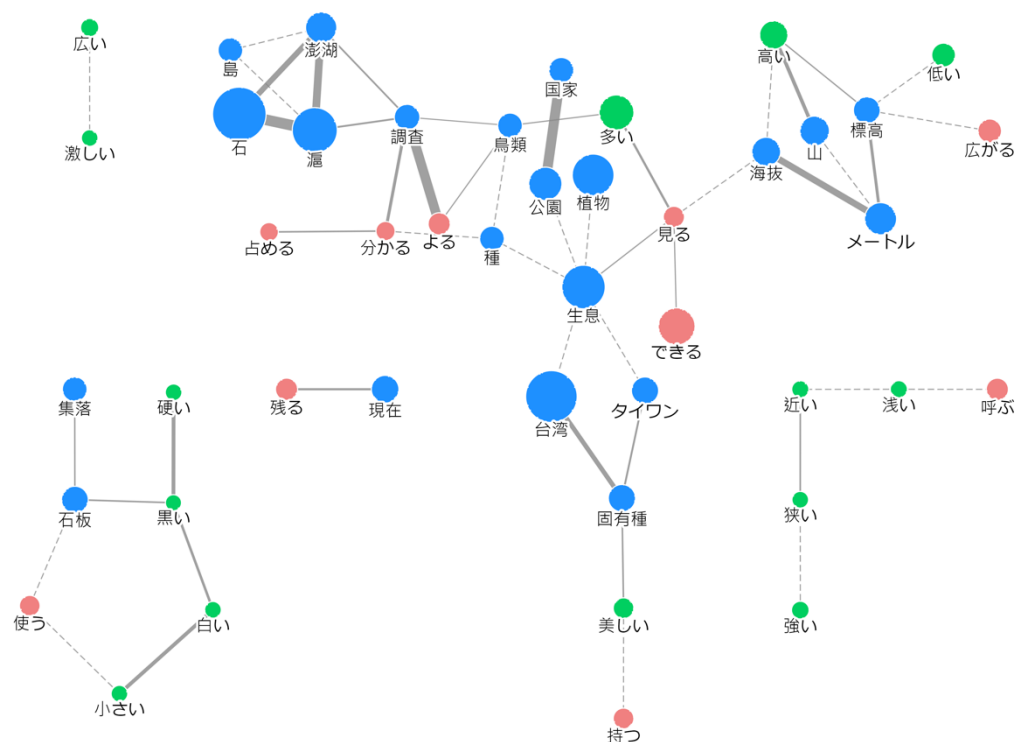


図4 「環境紹介」に使用される語彙の共起キーワード

5.5 「歴史と由来」に使用される語彙

図5に示されたワードクラウドからは、特に大きく表示された単語（「楽生」「ハンセン病」「日本統治時代」「患者」「玉山」「台湾」「集落」「遺跡」「院」「療養」など）が台湾の世界遺産候補地の「歴史と由来」に関する重要なキーワードであることが分かる。例えば、「楽生療養院」の「歴史と由来」では、「台湾でハンセン病はかつて『痲瘋』、『麻風』、『癩病』、『韓森病』などと呼ばれていました。台湾におけるハンセン病の看護記録として最も早いものは、清代、乾隆元年(1736年)までさかのぼります。彰化県令(県知事に相当)の秦士望が建立した養濟院の傍らにある留養局の碑には、養濟院ではハンセン病の患者と身体障害者を収容したと記されているほか、清の役人、周璽が記した彰化県志にもその旨が記されています。ただ、この記載のみからは、当時、養濟院でハンセン病患者を収容したこと、或いは医療行為が行われたことを直接証明することはできません

ん。その後、日本統治時代に入り、台湾では、外国籍の医師と宣教師の指導により、近代的な治療とケアが始められました。20 世紀の初め、アジアでもハンセン病の問題が重視されるようになりました。当時、世界各国のハンセン病の主な治療法は「隔離収容」、つまりハンセン病患者を 1 カ所の辺鄙（へんぴ）な場所に隔離し、外部との接触を禁止することで原因となる細菌の飛散を防ぐというものでした」と記述されている。この中で「ハンセン病」、「台湾」、「患者」、「日本統治時代」、「治療」などが重要なキーワードとして挙げられている。

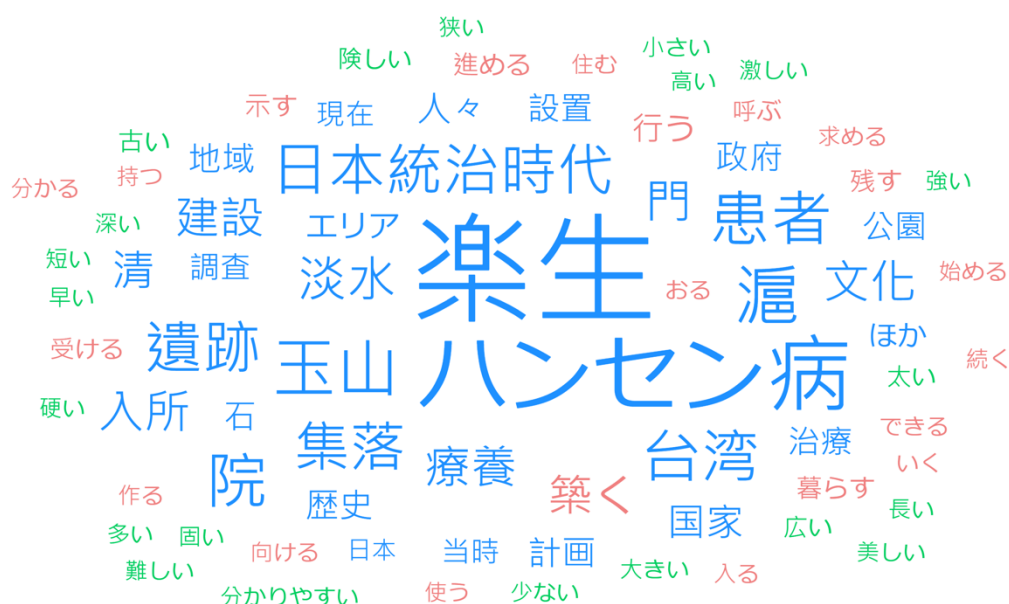


図5 「歴史と由来」に使用される語彙のワードクラウド

さらに、図 6 は、UserLocal テキストマイニングを用いて台湾の世界遺産候補地の「歴史と由来」に関する共起キーワードを示したものである。共起キーワードのペアが特定の文脈で使用されていることが分かる。たとえば、「台湾 日本」のような単語ペアは、文中で候補地の歴史と由来に関連した文脈で使用されており、その関連性が共起回数を通じて示唆されている。

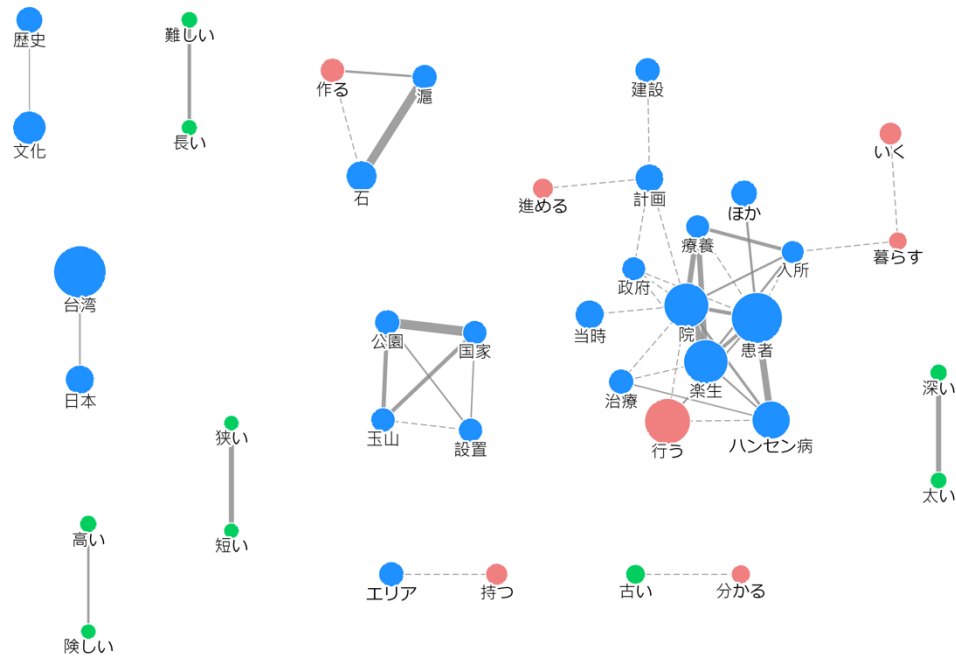


図 6 「歴史と由来」に使用される語彙の共起キーワード

5.6 「入選説明」に使用される語彙

図 7 に示されたワードクラウドからは、特に大きく表示された単語（「世界遺産登録」「項」「森林鉄道」「阿里山」「海拔」「玄武岩」「合致」「基準」「集落」「滬」「澎湖」「景観」など）が台湾の世界遺産候補地の「入選説明」に関する重要なキーワードであることが分かる。さらに、図 5 によれば、「世界遺産登録 基準」のような単語ペアは、文中で候補地の入選説明に関連した文脈で使用されており、その関連性が共起回数を通じて示唆されている。例えば、「阿里山森林鉄道」の「入選説明」では、「阿里山森林鉄道は、森林開発のために敷設された産業鉄道です。海拔 100 メートル以下の地点から海拔 2000 メートル以上まで駆け上り、森林鉄道であり、登山鉄道、高山鉄道でもあります。森林鉄道の開通は林業を発展させただけでなく、沿線の都市構造をも変えました。特色のある景観が多く生まれ、現在ではその中の 10 カ所以上が政府指定の文化景観や文化財、歴史的建築物に登録されています」と記述されている。この中で「阿里山」「森林鉄道」「海拔」「景観」「文化」などが重要なキーワードとして挙げられている。

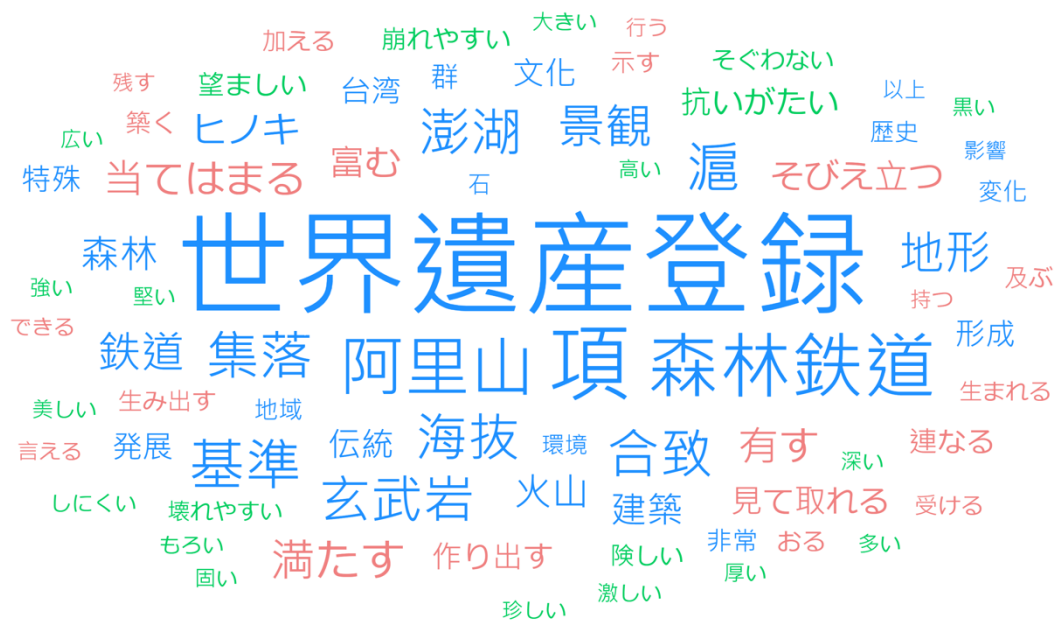


図 7 「入選説明」に使用される語彙のワードクラウド

さらに、図 8 は、UserLocal テキストマイニングを用いて台湾の世界遺産候補地の「入選説明」に関する共起キーワードを示したものである。共起キーワードのペアが特定の文脈で使用されていることが分かる。たとえば、「世界遺産登録 基準」のような単語ペアは、文中で候補地の歴史と由来に関連した文脈で使用されており、その関連性が共起回数を通じて示唆されている。

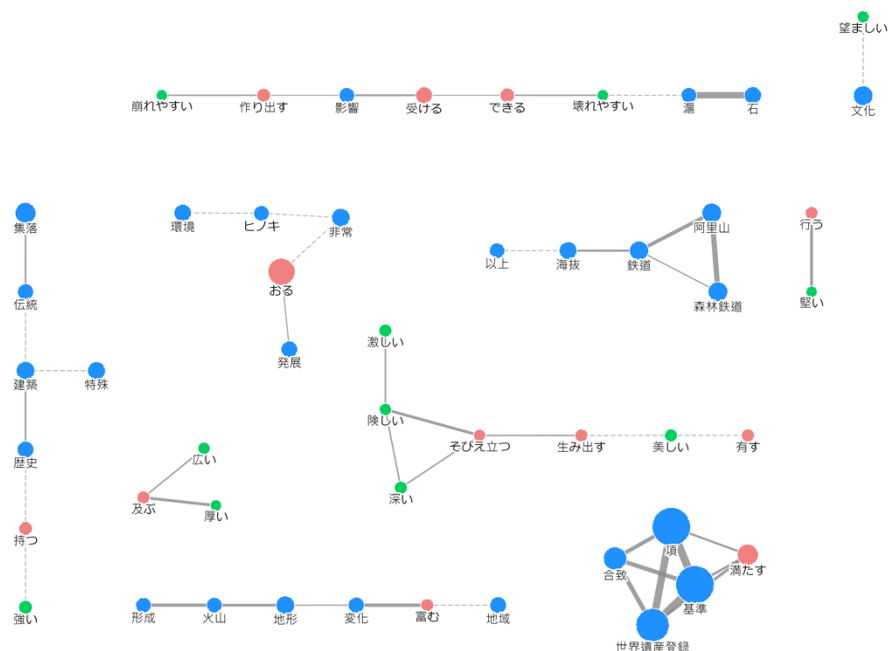


図 8 「入選説明」に使用される語彙の共起キーワード

6.1 台灣の世界遺産候補地に使用される語彙

まず、ワードクラウドの分析について説明する。図 9 に示されたワードクラウドからは、特に大きく表示された単語（「滬」「樂生」「澎湖」「台湾」「玉山」「ハンセン病」「集落」「淡水」「ヘクタール」「阿里山」など）が台湾の世界遺産候補地に関する重要なキーワードであることが分かる。例えば、「樂生療養院」を例に説明すると、特定の単語「樂生」と「ハンセン病」がワードクラウドで特に大きく表示されている理由は、通常の世界遺産候補地に関する説明が約 5,000 語に対し、これらの単語には 11,735 語もの説明が含まれているためであると考えられる。

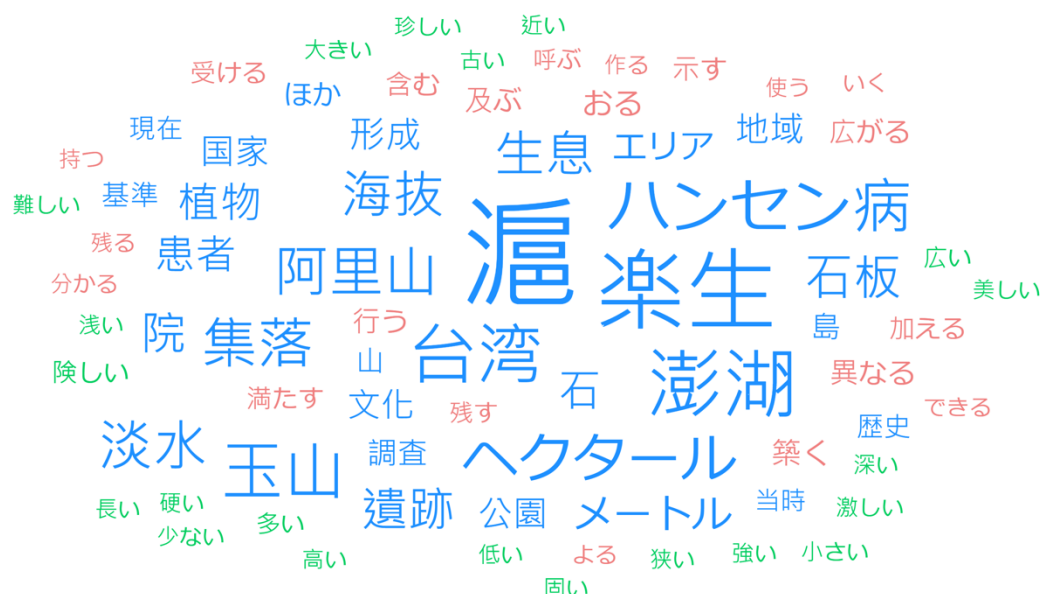


図 9 台湾の世界遺産候補地のワードクラウド

次に、単語出現頻度について説明する。この分析結果は、名詞、

動詞、形容詞の各カテゴリーに分けて、出現頻度上位 50 語を表 2 にまとめた。UserLocal テキストマイニングによれば、単語出現頻度は、文中で単語がどれくらい頻繁に出現するかを示し、単語の「スコア」の大きさはその単語が文中でどれくらい特異的であるかを示す。通常、単語が頻繁に出現するほど、その単語のスコアは高くなるが、一般的な単語（例：「言う」や「思う」）はスコアが低くなる傾向がある。表 2～表 4 に示された名詞、動詞、形容詞の出現頻度が高い上位 50 語を、日本語文章難易度判別システム jReadability⁶で語彙レベルを調査した結果、中級前半:28%、中級後半:26%、初級後半:19%、初級前半:17%、上級前半:11%という割合が確認された。なお、上級後半の語は見当たらなかったことも確認された。台湾の世界遺産候補地の説明文の半数以上が中級レベルの語彙で構成されており、文章全体の難易度は上級前半（むずかしい）から上級後半（とてもむずかしい）に相当することも分かった。ただし、名詞の場合、多くの語が漢字表記であり、漢字圏の台湾の学習者にとっては、単語の難易度は若干低くなる可能性があると思われる。

そして、スコアの重要性について説明する。スコアは単語の「重要度」を示す値で、分析結果を通じて単語の特異性を評価する。スコアの値に応じて、単語の文字サイズが変わる。スコアが高い単語は、その文章内で特に重要であることを示す。この情報は、説明や紹介文における単語の重要性を定量的に評価するのに役立つ。例えば、「ヘクタール」と「平方キロメートル」と「キロメートル」がワードクラウドで特に大きく表示されている理由は、通常の世界遺産候補地に関する基本説明が候補地の面積の説明が含まれているためであると考えられる。このように、特定の単語が大きく表示されることは、その単語に関する詳細な情報や重要なコンテンツが存在することを示唆している。この分析により、台湾の世界遺産候補地に

⁶ 「日本語文章難易度判別システム jReadability」は、文章の難易度を自動的に評価するツールである。このシステムは、日本語文章の理解のしやすさを評価し、6つの難易度レベルに分類する。初級から上級までの難易度をカバーし、教育やコンテンツ制作に役立つ情報を提供する。

関する説明と紹介においていかなる単語が特に重要であるかが明らかになり、その特徴を視覚化することに役立つ。

表 2 台湾の世界遺産候補地の単語出現頻度（名詞）

	名詞	スコア	出現頻度		名詞	スコア	出現頻度
1	台湾	717.17	196	26	当時	50.7	50
2	石	299.05	150	27	基準	104.27	49
3	滬	1602.66	111	28	歴史	86.7	49
4	患者	281.91	90	29	玉山	620.33	47
5	院	339.5	86	30	阿里山	498.88	47
6	地域	182.96	83	31	調査	113.87	47
7	楽生	1117.27	80	32	ヘクター ル	498.93	46
8	公園	193.3	79	33	石板	407.04	46
9	集落	538.33	77	34	分布	283.6	46
10	植物	306.86	77	35	項	231.71	46
11	生息	433.25	76	36	建設	161.85	45
12	エリア	168.62	74	37	非常	58.17	44
13	文化	177.33	73	38	門	148.56	43
14	現在	88.22	71	39	位置	58.71	43
15	山	98.02	67	40	環境	34.75	43
16	メートル	267.16	65	41	世界遺産登 録	421.58	42
17	遺跡	373.93	64	42	日本	13.38	42
18	ほか	91.26	64	43	玄武岩	489.89	38
19	澎湖	858.14	63	44	景観	234.48	38
20	淡水	493.52	62	45	地形	187.5	38
21	ハンセン病	609.45	61	46	以上	8.12	38
22	国家	190.81	57	47	療養	159.33	37
23	形成	214.1	54	48	面積	138.35	37
24	島	122.66	54	49	建築	98.81	37
25	海拔	444.12	52	50	施設	79.02	37

表 3 台湾の世界遺産候補地の単語出現頻度（動詞）

	動詞	スコア	出現頻度		動詞	スコア	出現頻度
1	おる	44.77	119	26	有す	76.52	15
2	行う	32.12	94	27	住む	3.7	15
3	できる	6.6	73	28	建てる	19.36	14
4	呼ぶ	11.87	41	29	進める	5.1	14
5	受ける	17.37	39	30	言える	1.84	14
6	使う	2.07	30	31	作り出す	29.27	13
7	持つ	2.41	29	32	生まれる	3.76	13
8	含む	26.79	26	33	属す	40.56	12
9	作る	1.83	25	34	占める	25.2	12
10	いく	1.2	25	35	達す	20.12	12
11	広がる	24.88	23	36	やってくる	5.04	12

12	残る	6.24	22	37	合わせる	2.39	12
13	よる	5.97	22	38	始める	0.77	12
14	及ぶ	36.66	19	39	向かう	1.83	11
15	残す	8.76	19	40	考える	0.35	11
16	分かる	1.36	19	41	造る	26.57	10
17	築く	45.51	18	42	求める	2.2	10
18	異なる	32.77	18	43	見て取れる	40.68	9
19	満たす	19.93	18	44	上る	15.49	9
20	加える	17.05	18	45	沿う	15.06	9
21	示す	24.01	17	46	設ける	14.47	9
22	至る	13.96	17	47	暮らす	5.57	9
23	続く	3.02	17	48	変わる	0.42	9
24	見る	0.21	17	49	富む	28.35	8
25	入る	0.58	16	50	当てはまる	9.08	8

表 4 台湾の世界遺産候補地の単語出現頻度（形容詞）

	形容詞	スコア	出現頻度		形容詞	スコア	出現頻度
1	多い	9.35	58	26	厚い	2.35	4
2	高い	7.63	37	27	太い	1.62	4
3	大きい	5.29	23	28	黒い	0.79	4
4	広い	13.4	21	29	もろい	3.97	3
5	深い	7.09	19	30	淡い	2.52	3
6	低い	6.57	18	31	しやすい	0.58	3
7	美しい	6.53	17	32	余儀ない	3.49	2
8	少ない	2.55	15	33	望ましい	3.05	2
9	強い	0.95	15	34	著しい	1.76	2
10	古い	8.05	14	35	緩い	0.56	2
11	硬い/固い/硬い	7.96	14	36	分かりやすい	0.46	2
12	長い	1.6	12	37	暗い	0.21	2
13	狭い	3.28	9	38	細かい	0.2	2
14	激しい	2.64	9	39	厳しい	0.09	2
15	珍しい	2.27	9	40	若い	0.09	2
16	険しい	17.83	8	41	素晴らしい	0.06	2
17	浅い	4.51	7	42	悪い	0.02	2
18	小さい	0.67	6	43	壊れやすい	3.67	1
19	近い	0.45	6	44	悲しい	3.67	1
20	難しい	0.29	6	45	勇ましい	3.67	1
21	よい/良い/いい	0.02	6	46	抗いがたい	5.36	1
22	白い	1.17	5	47	倒れにくい	5.1	1
23	短い	0.76	5	48	受けにくい	3.67	1
24	新しい	0.21	5	49	割れにくい	3.67	1

25	早い	0.07	5	50	入り込みやすい	3.67	1
----	----	------	---	----	---------	------	---

最後に、共起キーワードと共起回数について説明したい。
UserLocal テキストマイニングによれば、共起とは、一つの文章内で、特定の単語セットが同時に出現することを指す。共起回数は、その特定の単語セットが同時に出現した回数を示す。また、共起キーワードとは、文中において単語の出現パターンが似通っている単語同士を線で結びつけて可視化した図である。出現頻度が高い単語ほど大きく表示され、また共起の強度が高いほど太い線で表現される。
図 10 と表 5 は、UserLocal テキストマイニングを用いて台湾の世界遺産候補地に関する共起キーワードと共起回数を示したものである。表 3 においては、共起回数が 30 回以上の単語ペアのみが示されている。UserLocal テキストマイニングにおいて、1 つの固有名詞が 2 つの語に分かれる傾向が見られる。例えば、表 3 にある「滬 石」は実際には「石滬」という一つの単語を指し、それが 2 つの単語に別れて表示されている。同様の例として、「樂生 院」「公園 国家」「石金瓜」などが挙げられる。上記の例を除けば、共起キーワードのペアが特定の文脈で使用されていることが分かる。たとえば、「ハンセン病 患者」のような単語ペアは、文中でハンセン病患者に関連した文脈で使用されており、その関連性が共起回数を通じて示唆されている。この共起キーワードの分析を通じて、台湾の世界遺産候補地に関連する単語同士の関係性や文脈が視覚的に理解され、文章全体のテーマやキーワードの重要性が明らかになる。

表 5 台湾の世界遺産候補地の共起回数

	単語ペア	単語 1	単語 2	共起回数
1	滬 石	滬	石	187
2	樂生 院	樂生	院	107
3	ハンセン病 患者	ハンセン病	患者	69
4	公園 国家	公園	国家	67
5	滬 澎湖	滬	澎湖	54
6	澎湖 石	澎湖	石	51
7	滬 滬	滬	滬	50
8	ヘクタール 面積	ヘクタール	面積	47

9	基準 項	基準	項	46
10	石 石	石	石	44
11	樂生 療養	樂生	療養	41
12	療養 院	療養	院	41
13	世界遺産登録 項	世界遺産登録	項	40
14	世界遺産登録 基準	世界遺産登録	基準	38
15	石 金瓜	石	金瓜	35
16	ヒノキ 林	ヒノキ	林	34
17	患者 院	患者	院	33
18	メートル 海拔	メートル	海拔	32
19	太 魯閣	太	魯閣	32
20	公園 玉山	公園	玉山	32
21	患者 樂生	患者	樂生	32
22	滬 滬房	滬	滬房	31
23	国家 玉山	国家	玉山	30
24	ヘクタール ヘクタール	ヘクタール	ヘクタール	30
25	患者 行う	患者	行う	30
26	島 滬	島	滬	30

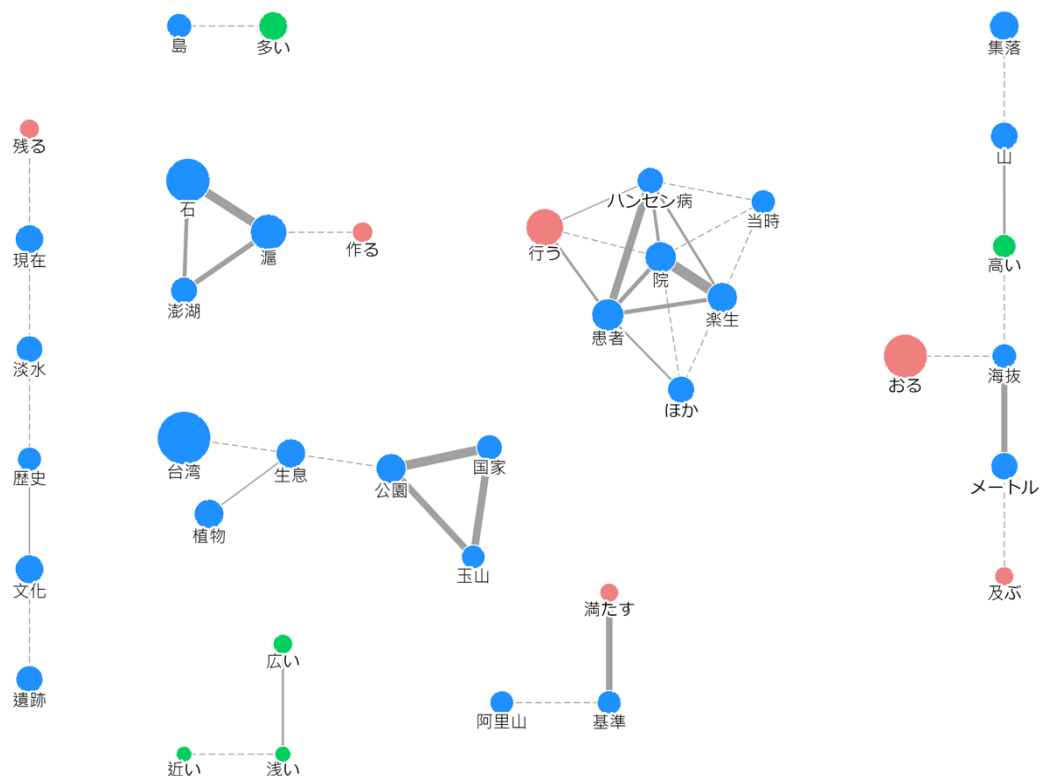


図 10 台湾の世界遺産候補地の共起キーワード

6.2 観光教材用の語彙選定

本稿では、台湾の世界遺産候補地に関連する観光教材用語彙の選定において、「基本説明」、「環境紹介」、「歴史と由来」、「入選説明」という 4 つのカテゴリーに分け、ワードクラウド、単語の出現頻度、

共起キーワード、共起回数に基づいた分析を行った。この分析は、教材の作成に当たって重要な用語を特定するために行われ、特に観光教材における表現の効果的な選定を目的としている。分析結果に基づき、「基本説明」、「環境紹介」、「歴史と由来」、「入選説明」の各カテゴリで共通する用語を選出し、それにより教材の内容をより分かりやすく、かつ情報量豊かなものにすることを目指している。以下が選出された用語の一覧である。

語	品詞	意味	語	品詞	意味
浅い	形	深さが浅い	倒れにくい	形	安定していて倒れにくい
新しい	形	今までにない、新しく作られた	高い	形	高さや値段が高い
厚い	形	表面から裏面までの距離が広い	達す	動	ある地点や程度に到達する
当てはまる	動	条件や状況に合う	建てる	動	建物を作る
阿里山	名	台湾にある山の名前	淡水	名	塩分の少ない水。地名
淡い	形	色や味が薄い	地域	名	ある場所、エリア
合わせる	動	一緒にする、調和させる	地形	名	地面の形状
いい	形	良い、望ましい状態	小さい	形	サイズが小さい
言える	動	話すことができる	近い	形	距離が短い
行く	動	移動する、ある場所へ進む	調査	名	情報を集めて調べること
石滬	名	台湾澎湖諸島の伝統漁法で、石を積んで潮の満ち引きを利用し魚を捕らえる仕掛け	使う	動	道具や物を利用する
以上	名	それより上、それを含むそれ以上の数や程度	作り出す	動	新たに作り上げる
遺跡	名	古代の建物や文化の跡	作る	動	物や計画を生み出す
至る	動	ある地点や状態に到達する	造る	動	建物など大きなものを作り上げる
著しい	形	目立つ、顕著である	続く	動	継続する、連続する
位置	名	ある場所、存在する地点	強い	形	力がある、頑丈である
院	名	組織、建物、特に病院や大学院など	できる	動	成し遂げることが可能
受けにくい	形	受けるのが難しい	当時	名	その時、その時点
受ける	動	何かをもらう、引き受ける	富む	動	豊かである、多く持っている
美しい	形	見た目が良い、心地よい印象を与える	長い	形	長さがある
生まれる	動	誕生する、発生する	日本	名	東アジアに位置する国の名前
エリア	名	区域、場所	残す	動	後に残るようにする
多い	形	数や量が多い	残る	動	そのまま残存する
大きい	形	サイズや規模が大きい	望ましい	形	そうあってほしい、理想的である
行う	動	実施する、実行する	上る	動	上に移動する
及ぶ	動	範囲や程度が広がる	入る	動	内部に入る、含まれる
おる	動	いる（「いる」の謙譲語）	激しい	形	動きや感情が強い、荒々しい
海拔	名	海面からの高さ	始める	動	何かを開始する
固い/堅い/硬い	形	柔らかくなく、強固な状態	早い	形	時間が短い、速度が速い
環境	名	周囲の状況や条件	ハンセン病	動	感染症の一つ、らい病
考える	動	思考する、判断する	低い	形	高さやレベルが低い
患者	名	病気や怪我の治療を受けている人	非常	名/形動	普通ではない、緊急の状態
変わる	動	変化する	広い	形	面積や範囲が広い
基準	名	判断の基礎となるもの	広がる	動	広くなる、拡大する
築く	名	建設する、作り上げる	深い	形	奥行きがある、内容が濃い
厳しい	形	厳格である、容赦がない	含む	動	中に持っている、取り込む
暗い	形	明るさが浅い	太い	形	幅や直径が大きい
暮らす	動	生活する	古い	形	時間が経過している、昔の

黒い	形	色が黒い、暗い色	文化	名	社会や地域に根付いた習慣や芸術
加わる	動	参加する、追加される	分布	動	広い範囲に分けて存在する
景観	名	風景や景色の状態	ヘクタール	名	面積の単位（1ヘクタール=10,000平方メートル）
形成	動	作り上げる、構築する	ほか	名	他のもの、別のもの
険しい	形	急で危険な様子	澎湖	名	台湾にある島の一つ、澎湖諸島
建設	名	建物を建てること	短い	形	長さや時間が短い
建築	名	建物の設計や建設	満たす	動	満ちるようにする、条件を満たす
現在	名	今の時点、今の時間	見て取れる	動	観察して理解することができる
玄武岩	名	火山岩の一種	見る	動	目で視覚的に認識する
玉山	名	台湾で最も高い山	向かう	動	ある方向へ進む
項	名	項目、部分	難しい	形	簡単ではない、複雑である
公園	名	公共のために設けられた自然の場所	メートル	名	長さの単位
抗しがたい	形	抵抗できない	珍しい	形	まれである、あまり見かけない
国家	名	国の組織、政府	面積	名	広さ、表面の大きさ
異なる	動	他と違う	設ける	動	設置する、用意する
細かい	形	小さい、詳細である	持つ	動	所有する、手に持つ
施設	名	建物や設備	求める	動	探し求める、要求する
島	名	水に囲まれた陸地	もろい	形	壊れやすい、弱い
示す	名	表示する、見せる	門	名	入り口の構造物
占める	動	場所や割合を占有する	やってくる	動	こちらへ向かって来る
しやすい	形	容易にできる、やりやすい	山	名	地面から高く盛り上がった土地
白い	形	色が白い	有す	動	持っている、所有する（文語的表現）
集落	名	小さな村、住居が集まった場所	緩い	形	傾斜や曲線がなだらかである
植物	名	生物の一種、花や木など	よい	形	良い、適している
少ない	形	数や量が少ない	余儀ない	形	他に方法がない、やむを得ない
進める	動	前に進むようにする、実行する	呼ぶ	動	名前をつける、招く
素晴らしい	名	非常に良い、優れている	よる	動	基づく、原因によって変わる
住む	名	ある場所に生活する	楽生	名	台湾の施設名（楽生療養院など）
生息	動	生き物が特定の場所に住む	療養	名	病気や怪我の治療のための休養
世界遺産登録	名	世界遺産に指定されること	歴史	名	過去の出来事や経過
石板	名	石の板	若い	形	年齢が低い
狭い	形	広さが小さい	分かりやすい	形	理解しやすい、簡単に分かる
沿う	動	ある物に沿って進む	分かる	動	理解する、認識する
属す	動	ある組織やグループに所属する	悪い	形	良くない、望ましくない
台湾	名	東アジアの島国の名前	割れにくい	形	壊れにくい、頑丈である

7. おわりに

本稿は台湾の世界遺産候補地の公式ウェブサイトを用いられている語彙の考察に焦点を絞り、以下の結論に至った。まず、台湾の世界遺産候補地の説明文の半数以上が中級レベルの語彙で構成されており、文章全体の難易度は上級前半から上級後半に相当することを確認した。さらに、特定の単語や単語グループは、候補地の特徴や重要な情報を伝える役割を果たしているが、これらの単語は視覚的

な情報抽出やテキストの要約に役立つ情報となり得ることを明らかにした。例えば、共起キーワードの分析により、特定の単語同士の関連性と文脈が明らかになり、台湾の世界遺産候補地に関するテーマやキーワードの重要性が可視化された。また、台湾の世界遺産候補地に関連する観光教材用の語彙選定も試みとして行うことができた。これらの研究の成果は、台湾の日本語教育や日本語ガイドの育成に貢献し、台湾の世界遺産候補地の理解を深め、持続可能な観光業界の発展に寄与することが期待される。また、コロナ禍後の台日観光旅行においても有用な情報を提供し、台湾の魅力を広める一助となる。今後の課題は、日本語を用いたディープな旅行ガイド解説モードを構築し、観光ガイドや台湾人日本語学習者に適した語彙を提供することである。このような取り組みが、台湾の観光業界をより魅力的かつ受け入れやすいものに変えることが期待される。

〈付記〉

本研究は台湾の科技部研究補助金による研究成果の一部としてまとめたものである。計画案の番号は NSTC 112-2410-H-130-005 である。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

(1)日本語文献

平野久美子 (2017) 『ユネスコ番外地 台湾世界遺産案内』、東京、中央公論新社

林長河 (2014) 「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索—語学教育理論の応用と課題—」『台湾日本語文学報』35、台北、台湾日本語文学会、pp.351-374

林長河 (2016) 「台湾日本語学科の自国文化に関する科目のコースデザイン—現状と課題—」『台大日本語文研究』32、台北、台灣大學日本語文學系、pp.137-163

(2)中国語文献

- 文化部文化資產局 (2012)『世遺 18 臺灣世界遺產潛力點向前行』、台中、文化部文化資產局
- 王浩一・劉克襄著、余境萱訳 (2017)『帶著 18 個記憶去旅行：臺灣世界遺產潛力點筆記書』、台中、文化部文化資產局
- 平野久美子編著、楊玉鳳訳 (2022)『臺灣的世界遺產潛力點』、台北、聯經出版事業股份有限公司
- 傅玉香 (2020)「連結地方創生的「導覽解說日語」—從課程設計與實踐過程的反思—」『台灣應用日語研究』26、高雄、pp.181-204
- 蔡豐琪 (2017)「日語「深度導覽」市場現況與「日語導覽」課程規劃」『銘傳日本語教育』20、桃園、銘傳大學應用日語學系、pp.77-96